

# TOKYO美人と、東京100ストーリー

## 心は翼

連載② (010 明治神宮)

穂高健一

打ち合せ通り、朝11時ちょうどだった。池袋中央小学校の3年生たち54人がセーフティの納品所にやってきた。引率教師がそれら生徒たちを3列に整列させている。社会科見学をまえにした生徒たちは興奮きみで、おしゃべりを止めない。

3人の教師がくり返し注意

をする。小太りの与謝野副校長がまえに進みでて、一言叱ると、生徒たちはとたんに静かになった。

井伊佳元は全員のまえで、自分を含めた、案内役3人の管理職



を紹介した。

「ふだん買物では見られない、裏方の作業場を中心にもてもらいます。見学コースには危険な場所がたくさんあります。機械類には手を触れないように」

パンや肉を切る、スライサーは日本刀のように鋭く回転する。ちよつとでもさわると指が落ちる、と生徒たちの顔をみながら注意をうながした。

かれの脳裏には2週間まえに起きた、従業

員の不注意による、鳴野佐和子の転倒事故が横切った。骨折した彼女はいまなお入院ちゆうだ。こうした売場の事故もあるが、後方作業場のほうがはるかに危険度が高い。

「冷凍庫も見てもらいます。床は凍っており、ツルツルで滑りますから、危険です。まわりはみな危険だと思ってください」  
こうした説明を簡略に終えた。

「1班は私です」

手をあげた店長代理が生徒を引率し、後方通路から食品バックヤードの方角に入っていく。見学は約40分間。短時間だけに、3グループの見学は、前がつかえて滞留しないように、それぞれコースをちがえている。

2班の案内役はフロア・マネージャーで、鮮魚部門からスタートする。



トラックが勢いよくバックで納品所に入ってきた。

「止まれ」

井伊が大声で、トラックを制止した。事故が起きたらどうするんだ、とガードマンを叱責した。

井伊が案内するのは、新婚の久能幸子教師が受け持っている3班だ。彼女はすでにデジカメを手にしている。最後尾では、全体を統括する与謝野副校長が付き添う。

惣菜作業場の出入口で、井伊は列をとめた。引き戸を開けると、熱気と油のにおいが飛びだしてきた。2台のフライヤーでは魚類の天ぷらが揚げられている。

「5人ずつ作業場に入って。一度に入ると、狭くて危ないから。順序よく。あわてなくても、見られるから」

井伊は列を小割にしながら、グループの先頭から招き入れた。フライヤーの油面が沸き立つ。

「油は何度ですか」

久能教師が生徒にも聞かせる口調で質問した。

井伊はあえて作業するパートに答えさせた。

「いまは170度です」

とデジタル表示を指す。生徒たちはその数字を書き取っていた。井伊は、先頭グループを惣菜の米飯室へと誘導した。男子社員



とパート従業員が肩をならべて江戸前寿司をにぎる。その横で、寿司ロボットがシャリ(酢飯)を1カンずつ作りだす。

「すごい。すごい」

生徒たちは目を光らせる。面白がっている。われ先に見たがる。「ここはゆっくり見ていいから、押さないで」

井伊は生徒の一人ひとりに時間を与えた。久能教師が「順番よ」とくり返す。その一方で、デジカメで、見学風景を撮りはじめた。

井伊のPHSが鳴った。緊急以外は鳴らすな、と事務員に伝えている。それだけに、何ごとか、と電話に出てみた。

「恋人からですよ」

事務員が冷やかしの口調でいった。

「そんなものはいない」

井伊は別居ちゅうの妻かと思った。

「お客さまですか、とお伺いしたら、私用です、と応えましたが？ 鳴野佐和子さん、というかたです」

「私用じゃない。彼女は店内事故の被害者だ」

「あつ、……、店長が面倒を看ている女性ですね」

事務員が妙になれなれしく口を利くときは、社内のうわさの発信源となる。うかつな説明はできない。

「あとから電話を掛けなおして欲しい、と伝えてくれ」

「ちよつと出てあげられたら、どうですか。急いで取次いで欲しいという、口ぶりでしたよ」

鳴野佐和子から、おびえる悪魔の話が出てくると、きつと長引

いてしまう。そう思う反面、こちらから彼女に電話を掛けなおすととなると、ナースステーション経由で、手間がかかる。かれは戸惑いながらも、

「社会科見学の案内ちゅうだ。12時半以降なら電話に出られると、伝えてくれ」

と、いつてPHSを切った。

生徒たちはなおも寿司ロボットのまわりで、興奮している。

案内する井伊は手空きから、彼女の詩の創作ノートを思い浮かべた。そのなかのひとつ、短くても強く印象に残る、タイトル『ある日に』という詩を口ずさんだ。



じぶんのことを嫌いきり

じぶんをがんじがらめにしばって

ぜったいゆるしたくない

——ゆるされたいために

この作品から、詩人・佐和子の苦悩が伝わってくる。

『ぜったいゆるしたくない』というあいては悪魔だろう。6歳児のころから誘拐犯を許せない気持ちがつねに、彼女の底流にあるのだ。

佐和子が大学病院に入院してから、すでに2週間が経つ。いまだに病院関係者に問われても、住所、電話番号、両親の存在すら教えないのだ。彼女は入院の身をだれかに話せば、悪魔に情報が流れてしまう、と怖がっている節がある。病院側は、セーフティが金銭面で保障しているからなのだろう、もう彼女に問わないようにしているようだ。

『ゆるされたい』というのは、彼女の心を呪縛する悪魔からの解放だろう。彼女の心痛を想うほどに、何とかしてやりたい、という気持ちが一段と強まる。

入院ちゅうの佐和子には、井伊だけが唯一の見舞い客だった。(事故の責任はすべてセーフティにある。入院生活に必要なものは一通り買いそろえる)

それは会社の判断であり、承諾事項でもあった。

井伊はこれまでにも、病室用テレビのリース契約をしたり、瀬戸物の花瓶に花を活けたり、副食、果物、ヨーグルトなどをも届けたりしてきた。

井伊には一人娘の晶子がいる。大学1年だが、かりに娘が入院しても、自分はこれだけのことをするだろうか、と思ってしまう。実娘は可愛い。けれど、自分はしごとを理由に、別居ちゅうの妻に、その世話のほとんどを押し付けてしまうはずだ。

鳴野佐和子の場合、3日に一度は見舞う。彼女には必要とするものをメモに書いておいてもらった。それを店に持ち帰り、女性の必需品などはレジチーフに選ばせていた。花柄のパジャマ、

衣類、下着、生理用品などを手にしながら、レジチーフは首を傾げていた。

「こんなものまで、傷害保険が利くのかしら？」

「おれの自費だよ」

「慈悲？」

「ちがう、自費だ」

「ここまで世話をするなんて、鳴野さんが美人だからでしょ？」

レジチーフは嫉妬の口調で冷やかす。

「顔立ちに関係ない。事故の責任が全面的に店側にあるからだ」

「うそだあ。店長は面食いだから、顔でエコ贖罪するからね。：

。美人ほど、人事考課の評価が高いよ、なんて、もっぱらの評判ですよ」

「ふーん。ある面では、当たっている。池袋店は男女問わず、仕事でミスばかりしてくれるからな。全員の評価点が最低とはいかないだろう。だったら、顔でしか評価できない。レジチーフは顔立ちが好くてよかったね」

「それって、喜ぶべきかしら、悲しむべきかしら」

「働きも、顔も、二つの評価が高いんだよ」

「さすが、店長。お世辞がうまいですね。私に鳴野さんの好みに合いそうな、良い品物を選ばすための煽<sup>た</sup>ででしょ。店長の話しはすべて鳴野さんの道に通じているんだから」

「見舞客が誰ひとりいないから、おれがしかたなく世話しているだけだ」

「うそっぽいなあ。見舞客が一人もいないだなんて……。もう少し上手に、ウソをついたら、どうなんですか？」

レジチーフとのやり取りはいつもこんな調子だった。

3班のグループが、寿司ロボットを見終えた。井伊の意識がすぐさま生徒たちにむけられた。全員を惣菜作業場から、冷凍庫のまえまで移動させた。それぞれに温度を推測させた。マイナス80度とか、メチャクチャな温度をいう生徒もいた。ころあいをみてから、かれは、頑丈な扉を開けた。冷気が白い煙のように足もとから広がった。

「すげえ」

生徒たちが驚嘆<sup>きょうたん</sup>の声をあげる。

上下左右が真っ白な氷と、霜と、

氷柱<sup>つらら</sup>がたれ下がる世界だ。庫内は

氷点下25度で、商品のダンボールが雪の結晶<sup>けっしょう</sup>のように氷結して

いる。全身が凍りつく体感温度だけに、一気に、にぎやかになつた。生徒の興奮は頂点に達している。

「気をつけなさい。足もとが滑るわよ」

久能教師は生徒に注意しながら、みずからも庫内に入っていく。「子どもたちには、いい体験だ」

与謝野副校長は、冷凍庫の見学を希望していただけに、満足そうな口振りだった。



「先生も入られたら、いかがですか」

「じゃあ。数十年ぶりに、冬山体験を味わってみるかな」

与謝野を庫内に送り込んだ井伊は、鳴野佐和子の誘拐事件を考へはじめた。八ヶ岳の酷寒の冬山は、氷点下20度まで下がる。厳冬期の山小屋となると、冷凍庫のように、室内全体が凍りつくような状態だ。

6歳の佐和子は、雪が積もった山小屋で発見されたという。1日の軟禁でも極限の場所だ。何日間くらい、閉じ込められていたのか。両親から切り裂かれた、少女はどんな苦境の世界だったのか。……だが、なんの目的で仕掛けたのか。真犯人はどんな人物か。

(冬山を知る与謝野副校長も、容疑者のひとりかな?)  
そんな途轍もない思慮もしてみた。  
PHSが鳴った。

「鳴野さんからの伝言です。きょう午前ちゆうに退院したそうです」

「退院できたのか。よかった」

ずいぶん回復していたからな。そうつぶやいた。

「もうひとつ伝言です。午後2時に、明治神宮の鳥居のまえで待っているそうです」



「明治神宮の鳥居は、何ヶ所もあるはずだ?」

「言われたとおりです。デートの場所はプライバシーですから、突っ込みはできません」

「デートじゃない。ま

さか、今日の話じゃないだろうな。午後は社長の店まわりがある」

鬼頭統括部長が付

き添ってくる。

「きょうです」

「まずいな。鳴野さん

の電話番号は訊いてくれたか?」

「あら、店長はご存知ないんですか。3日にあけず通いつめて、ケイタイの番号も聞き出せていないなんて、初心ね」

「彼女は退院したのだろう。連絡の取りようがない」

「店長が約束の2時に、明治神宮にいなければ、また電話がかかってくると思いますよ」

「社長がこの店に来ているときに、彼女から電話がかかってきたら……? こうした嫌な予感とはかく当るものだ」

そうなると、これまた厄介だ。

『社長がきているのに、女と電話か』

鬼頭はきつと怒りだす。社長のまえだから、なおさら格好つけて怒鳴るだろう。店内事故の被害者の鳴野佐和子さんだといって



も、鬼頭は一言や二言では信じてくれないはずだ。

「社長がいらしていても、取次ぎましようか」

事務員がいった。

「いや。もう1時間後にはかけなおしてほしい、と伝えてくれ。社長はどうせ1時間くらいしか、店にいない」

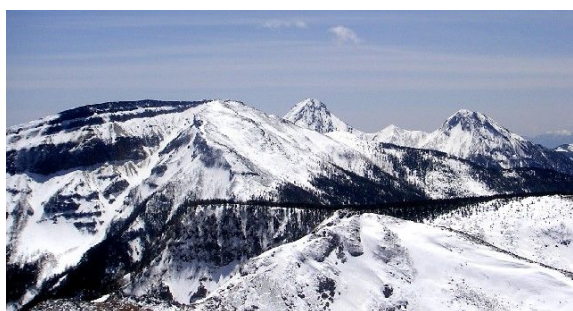
「かわいそう。きょうが退院日でしょ。明治神宮の鳥居の下で、何時間も待たされるなんて、気の毒な女。入院ちゆうは何度も見舞いにきてくれたのに、退院した途端に、店長が冷淡になったなあんで、思われますよ」

「かわいそうでも仕方ない。会いたいといってきたても、今日のきょうの話しだ。こっちにも都合がある」

それは井伊の本心ではなかった。事務員とのやり取りを終えると、井伊は社長よりも、鳴野の方を優先する手立てはないものかと、奇策を考えはじめている自分を意識した。

最後に冷凍庫に入った与謝野副校長が真っ先に出てきた。

「……、青春時代の冬山登山を思い出しました。とくに、大学卒業まえには、念願だった、雪峰の八ヶ岳の主峰縦走を」  
「冬の主峰縦走というと、赤岳あたりからスタートですか」



「そうです。縞枯山まで。途中で、寒波の襲来から、氷点下20

度まで下がった。天狗岳の無人の避難小屋に閉じ込められた。トイレは戸外だし、辛かった。猛吹雪だと、視界がなくなる。下手をすれば、迷って帰って来れず、凍死だから、それは怖かった」

濃霧や吹雪の場合は音がたよりになる。……パーティー仲間いたのんで、小屋の入口に吊りさがる、鐘を打ちならしてもらい、避難小屋に帰ってきたという。

「天狗岳から、本沢温泉に下られた？」

「いや、稜線から本沢温泉まで下り、湯に入っ、また主脈に登ってくるのはしんどい話だから、そのまま北に縦走しました。縞枯山から、下山用に使う坪庭のロープウェイまで」

「副校長はキーもやられていました？」

井伊はあえて急に話題を変え、悪魔との兼ねあいをさぐってみた。

「スキーはやらなかった。山スキーも、ゲレンデも。もっぱら、雪山はピッケルとアイゼンで登るだけでした。それが醍醐味でしたから。ただ、山麓にスキー場があれば、登りも、下りも、高度



さを稼ぐために、ロープウェイやリフトなど使いました」

スキー場にはリフトがある。裾野からトコトコ歩きで登る、そんな登山者はまずいない。

「学生時代の私は、官僚に憧れ、国家公務員試験を狙っていました。4シーズン、山ばかり登っていたから、不合格、ダメでした。20年以上経つと、いまでは教員でよかったと思いますよ」

生徒たち全員が出てきたようだ。井伊は庫内を確認し、久能教師には念のために生徒の点呼を頼んだ。もはや庫内に誰もいないと確認できた。

かれはふたたび整列できた生徒たちを動かしはじめた。精肉、鮮魚、青果など生鮮のバックヤードを見させてから、ベーカリーまでやってきた。釜の温度は220度で、熱気が漂う。早朝に酵母を発酵させてから、パンができるまでの過程を説明した。そして、休憩室に移動させた。

54人の生徒が一堂に揃うと、20分間の質疑応答がはじまった。生徒たちは、われ先にと、手をあげる。その都度、教師が指名する。……従業員数、最も売れている品物、忙しい時間帯などの質問が出てくる。生徒たちは左右を覗き込んだりしながらも、熱心にメモを取る。生徒を見送ったのは12時過ぎだった。店長室では、厚揚げメ



ーカーの営業部長がかしこまって待っていた。

「厄介な相手でしょう。あの柳下は」

井伊は向かい合った。

「はい。訪問するたびに、3時間以上です。文書で提出しろ、と要求されましたから、きょうはこれを持参します」

営業部長は、『コンベアー不良による、ベアリングが厚揚げに混入』という調査報告書を持参していた。

「ベアリングの寸法は、ノギスで測らしてもらえましたか」

「いや、そこなんですが、おねがいしても、オレの話を信用しないのか、と恫喝するだけで、駄目でした」

厚揚げメーカーの工場では、折々コンベアーが不調で、分解して修理しているという。ベアリングが飛んで厚揚げ製品に混入することは考えにくいだが、人間のやることだから、ゼロではないと話す。そのうえで、

「きょうは落としどころか、と思ひまして。セーフティーさんで2万円の商品券を購入しました」

「2万円は使うことはない。癖になる。私が出向いて解決してきます。手ぶらで、大丈夫」

「それだと、収まりがつきそうにもない相手です」

「いや、大丈夫。今日で、この件は解決させますから。もし、貴社に電話が入ったら、セーフティーの井伊店長に一任している、商品券も預けた、と突っ張ってください。きつと電話はいかないと思うけれど」

井伊が確信のある目をむけた。

「お手数を煩わづらわせます」

営業部長はひたすら恐縮きようしゆくした顔だった。井伊は念のために書類をもらっておいた。

これで外出の口実ができた。鳴野佐和子と会える、と井伊の心が弾んでいた。かれは昼食抜きで、背広に着替えた。事務所のまゝでは、クレームで出かけてくる、と一言声をかけた。

「明治神宮の鳴野さんは、どうになりました？」

女事務員が小窓から身を乗りだすようにして、訊いた。

「連絡がついたから、あさつての休みの日に変更してもらった」

「ほんとうかしら？ きょうは明治神宮に行くんですよ」

「信じてないな、厄介なクレームの処理だ。厚揚げメーカーの、この書類をしてみる」

「怪しいな？」

「なんなら、一緒に連れて行ってやろうか」

「クレームは一刀両断に終わらせてから、大切な女ひとに逢いに行くんですよ」

「まだ疑った目だな。あいては腹たたい、悪質なクレマーだ。そうだ。社長がきたら、すぐ店長代理をよんでくれ。打ち合わせずみだから」

井伊は柳下のすむ江古田に向かった。武蔵野音楽大学のキャンパスの裏手を回り込んだ。奥まった路地の先の、木造二階建てアパートに着いた。池袋店に着任してから2年間、ここに来たのは

何度目だろうか。

二階の外階段から、玄関ドアの呼び鈴を鳴らす。室内にいるようだが、すぐには出てこない。いまは12時50分。明治神宮には2時ちようどに着きたい。あまり時間がない。腹立つほど焦しどろさされてから、柳下が出てきた。

「なんだ、セーフティか。厚揚げメーカーが書類を持ってくるというから、きょうは仕事を休んで、朝からずっと待ってたんだ」

柳下が眉間まげんに縦たてしわを寄せた。

「パチンコ玉を確認させてもらいにきました」

「だがパチンコ玉だといった。ベアリングだ」

「あんたが最初に、そういった」

井伊はかぎられた時間を意識し、強気の状態をとった。

「聞きがちだろう。オレは最初からベアリングだといってた」

「見え透いたウソだ。あんたも大人だろう。2週間まえのことだ。

子どもじみた、ウソはつかないほうがいい」

「喧嘩を売りに来たのか」

「大人なら、もつと利口な手口を考

えるんだな。ベアリングにはサイズがいろいろある。工場の搬送用機械

には、パチンコ玉のサイズのベアリングなど使っていない」

「ここは張はつたりだった。どうせ、相手も判っていないことだ。おれが工場をみてないからといって、いい加減なことを言う





な」

「工場を見たって、ベアリングの玉など、外観から見えるはずがない。なにもわかってない」

「出る所に出ようじゃないか。消費者センターに訴えてやる」

「それを持ちだせば、スーパーは遜ひくたってくると思っている。

消費者センターは、消費者の相談事に対して、対応策のアドバイスをしてくるところで、強制力はない。ベアリングの証明なら、金属科学研究所で分析してもらいなさい、と懇切丁寧にアドバイスしてくれるはずだ」

「グダグダぬかすな。それなら、金属科学研究所で分析してもらおうじゃないか。一切の費用はセーフティー持ちだ」

柳下が目を吊り上げ、声を荒げた、どこまでも金を強請ゆすりとうとする態度だった。……悪意に満ちた人間は、お客じゃない、犯罪者だ。社会の悪人がのさばっている、と思うと、井伊は無性に腹立たしくなった。

「パチンコ玉と、ベアリングのちがいはなんだか、わかっていないようだ。パチンコ玉の特徴は、表面の研磨けんまが粗いことだ。パチンコ握せが、精密せいみつに磨かれたベアリングを使えば、どうなる？」

精巧なベアリングほど、おなじ角度で、おなじリズムで、おなじバンドで、正確に弾はむ。一つ当り玉になれば、全部がつづけて当りになってしまう。ところが、パチンコ玉は球形きゅうけいの表面が荒い。荒いほどイレギュラーで飛び跳ねる。だから、遊戯きになる。

「顕微鏡で、パチンコ玉を観察すれば、表面はゴツゴツしている。一目瞭然だ。あんたが手にしている、その玉の直径を計測けいそくすれば、厚揚げメーカーのコンベアの球形とはサイズがちがう。あんたがこのまま押しつづければ、メーカーに刑法の威嚇業務いかくぎょうむ妨害ぼうがいで、訴えさせる」

「くそっ」

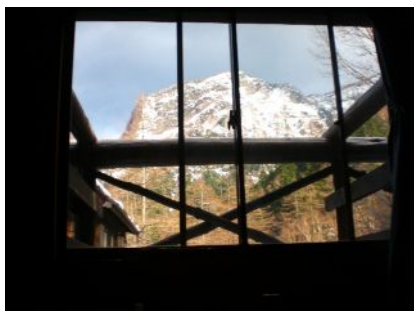
「セーフティー池袋店を脅おどすなら、もっと知恵を使うんだな」

「いいか。このままじゃすまないぞ」

「これで、失礼します」

最後は丁寧なことばを残してから、井伊は外階段を降りていった。江古田駅の方角にむかった。井伊は時計をみた。悪質なあいてだけに、ベアリングの説明など、思いのほか余計な時間を取られたようだ。急ぎ足になった。

西武線に乗った。この先、20年まえに八ヶ岳で6歳の少女を誘拐した犯人の手がかりとか、証拠とか、あるいは証言者が得られるのだろうか、とかは考えた。思慮するほどに、途轍とつもなく難しい。事件解明の切口とか、ヒントとかをつかむためにも、八ヶ岳の現地に足を運んでみる必要を感じた。



かれは池袋駅で、乗り換えた山手線ホームで、東中野店の店長に電話を入れてみた。セーフティー山岳部の仲間だ。八ヶ岳の積雪期の登山を誘った。

しかし、東中野店長は、正月休暇の振替え3日分はもう使っているし、連続休暇は取れないという。冠婚葬祭の口実はないのか、と訊くと、伊井店長とはちがう、鬼頭統括部長を敵にまわしたくない、ウソをつけてまで山に登る度胸はないと断ってきた。

社長の店まわりはどうだった？ その情報を聞きはじめると、電車が入線してきた。

原宿駅に着くと、かれは小走りで明治神宮に向かった。嶋野佐和子が最初の鳥居の下にいた。彼女は松葉杖を持っていなかった。

「悪い。20分も待たせてしまった」

「来て下さらないのか、と思っていました。電話口にも、出られないほど、いい加減さんはお忙しそうでしたから」

「すまない。クレームをひとつ処理してきたから」

「入院ちゆうは、いろいろご迷惑をおかけしました」

彼女が丁寧なおじぎをした。

「こちらこそ、大変な目に遭わせてしまった。松葉杖がなくても、だいじょうぶ？」

「短い距離ならば、平気です」

リハビリをがんばりましたから、と彼女はつけ加えた。

「松葉杖がなくても明治神宮まで、歩いてこられる距離となると、あなたの住居はこの近く？」

「裏稼業人は、ちょっとしたヒントから、詮索するんですね。いい加減さんにも、まだ私のマンションは教えられません」

「いい警戒心だ。足の負担のならないように、喫茶店にでもいこうか」

井伊の視線が原宿駅の方角にむけられた。

「きょうは退院日ですから、お礼参りをしたいのです」

「神仏を崇める。それは良いことだ」

ふたりは本殿にむかう幅広い南参道を進みはじめた。足もとでは玉ジャリの音が心地よくひびく。外国人の観光客がずいぶん目立つ。

武蔵野の雑木林の面影が残る、参道だった。大都会とは思えない空気が吸える。斜め頭上から、3月の陽光が樹幹の間を射す。

「ここは江戸時代に、井伊家の下屋敷があったところだ」

「ご先祖なんですか。大老の井伊直弼とかが……」

「いやいや。うちは明治になってもらった、苗字だ。きつとおれの性格に似た、いい加減な先祖がいた。『あんたのところは、井伊がいい』と誰かにいわれてつけた。そうに決まっている」

「愉快な話し」



彼女がくすつと笑った。

「ところで、店内の事故の後、レジ台の下からこれが見つかった。きょう、もってきた」

井伊が、『詩集ノート 鳴野佐和子』を差しむけた。

「最初に病室で会った日、インドの話が出ましたから、創作ノートはいい加減さんに見られていると、ぴんときました」

「面目ない。実は無断で読ませてもらった、怒っている？」

「いいえ。詩は他人に読んでもらい、感じていただくものですから。ただ、このノートには未完成の作品も多いし、戸惑いもあります」

木漏れ陽が、彼女の困惑した顔を浮き上がらせていた。

「返すタイミングを失ったひとつには、深層心理の追及があった。詩は心の語り。悪魔となった、誘拐犯に結びつく手がかりや影をさがす、そんな気持ちで読ませてもらっていた」

「役立つものなら、創作ノートはお預けします」

「いろいろな角度から、分析させてもらう。ところで、『レゾン寺院からの手紙』の詩だけど、標高6000メートルとあるけれど、奇異な感じがする。人間の生活圏をはるかに越えた、登山家の領域だ。そんなところに寺院があるとは思えない。フィートのちがいがいいかないかな」

「私は一度もインドに行っていないませんし、山岳に登った経験もありません。単純に高い山というつもりで使った標高です」

「だとすれば、標高約2000mの寺院は納得できる。ところで、

インドの詩が多いようだが、だれからきた手紙なの？」

「母からです。標高は母の書きがちがいか、私の読みちがえでしょう。最近になって、中学生のころ受け取った、母の手紙を読み直し、イメージして作った詩です」

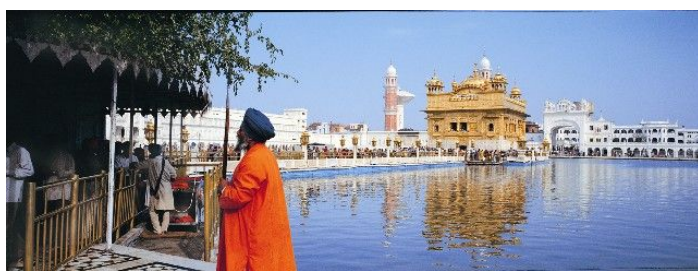
「母さんはヨガの修行にでも、いかれたのかな？」

「いいえ。父がインドの日本大使館に勤務してましたから。母もいっしょでした」

佐和子は6歳の誘拐事件のあと、祖父母の家で育てられたという。その経緯は、父方の祖父母が、『わが子を誘拐されるような嫁に、鳴野家の孫を育てる資格はない。うちで預かる』といい、一方的に決めた。母はわが子から目を離れた自分の責任だといいい、それに従った。そう聞かされている、と佐和子は語っていた。

「あなたのお母さんは、誘拐事件のあとの、つらい気持ちからか、インドに行っても寺院巡りが多いんだな」

「きっとそうなんだと思います。6歳の私が居なくなっただけの2週間、母は半狂乱だったと、親戚の人から聞かされたことがあります」



誘拐事件が母子ともに、長く心の傷になつてゐる。井伊はまたしても、犯人が許せない、という気持ちに駆り立てられた。

「祖父母は、わたしが外国で誘拐されると大変だからといい、パスポートも取らせてくれません。両親が外国住まいでも、一度も国内から出たことがないので」

「父親は外務省勤務なの……」

「いいえ、当時の大蔵省です」

「大蔵省からインド大使館に出向していたとなると、ファイナンス・アタッシェだ」

「そうです」

大使館員は各省庁からの集まりである。かれらをアタッシェと呼ぶ。語源はフランス語らしい。財務省からきた大使館員はファイナンス・アタッシェ、法務省はロイヤル・アタッシェ、防衛省はミリタリー・アタッシェ（戦前は武官）という。

「その後は？」

「インドから大蔵省にもどりました。一度、大使にもなりました。一昨年、退官してアメリカの大学で、東洋財政学を教えています」

「父さんから、誘拐事件について、なにか聞かされています？」

「……。もう思い出すのも嫌だといひ、話したがりません」

佐和子の口が妙に重くなった。

「犯行目的について、なにか聞いていないかな？ たとえば、身代金の要求があったとか」

「話したがりません」

犯人が佐和子を殺すのではないかと、あんたん暗澹たる日々だった、と聞いたくらいです」

犯人はなぜ6歳児を冬の八ヶ岳連峰で連れまわしたのか。それを考えるほどに、不可解な事件だと思ふ。

「創作ノートに、一つ詩を追加させてください」

あなたは 崖

わたしに内在する言葉だから

わたしはたえず

崖から落下する蝶

落ちようとして浮かび

浮かびながら落ちる

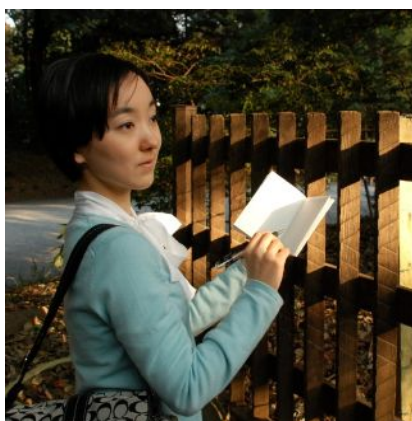
ゆるやかな墜落

佐和子は『受容』というタイト

ルをつけた。

「崖とは、そそり立つような、恋人、という意味かな？ どんな男性？」

「かれは長距離ランナーで、大学で陸上部のコーチをしています。運動の苦手な私には憧れの男性あこがでした。かれは1万メートルの記録を持っていました。1年半ほど交際しましたが、私は墜落していく、蝶でした」



「なぜ、かれとの交際を止めた？」

「この明治神宮で、去年、文芸クラブのひとつ先輩の結婚式がありました」

「境内から、悪魔が出たとか？」

「いいえ。この神社ではありません。披露宴

のあと、渋谷のレストランの二次会にむかっ

ているとき、怖い目に遭いました。かれは、わたしの恋人ということで、二次会に招かれていました」

渋谷駅で待ち合わせをした、ふたりは、道玄坂交差点をわたった。その先で、騒

ぎがあった。喧嘩なのか。

男女の悲鳴が聞こえた。ふたりは足を止めた。突如として、暴漢がこちらに向かってきた。角刈り頭の恋人が襲われた。路上に

転倒した。かれは刃物でわき腹を刺されていた。

和服姿の佐和子は、血が噴出すかれの身体においかぶさり、もう刺さないで、と泣き叫んだ。道玄坂の騒ぎだけに、大勢のケイ

タイから110番通報が入っていたらしい。駆けつけた警察官が刺した犯人を取り押さえた。  
「悪魔が見えない手で、私が恋する男性を殺そうとした。そう思



うと、身震いがして……」

「取り押さえられた犯人が、かつての誘拐犯に似ていたとか？」

「20年まえの犯人の顔は思い出せないのです。わたしには」

かれを刺したのは、30歳代のスナ

ックの従業員だと、警官から聞かされ

た。恋人は喧嘩仲間とまちがえられたらしい。

「凶器は？」

伊井が訊いた。

「かれは調理用の肉きり包丁で、刺されました。20年前に、悪魔から、逃げたら殺すぞ、と包丁で脅された記憶があります。その包丁にそっくりでした」

「六歳の少女を脅した刃物が登山ナイフでなく、肉きり包丁？」

「かれの退院後、私はお別れのメールを送りました。かれからは、その理由が知りたいと、何度もメールがきました。『私と交際している、また、あなたは悪魔に狙われます。わたしの心には、もう愛の翼などないのです』という内容が最後になりました。そ

の後、かれから音信がなくなると、もう悲しくて」



「強いショックだったわけだ」

「別れてみると、ことばで言い表せないほどの、ショックでした。私にはもう愛の翼がない。雪山で死ぬのが一番。6歳の時に死んでいてもおかしくなかった山岳で死にたい。でも、凍死できる雪稜に登るには、体力がないし……」

そんな悶々とした日々がつづいていた。

それから怖い目に何度か遭って、旧古河庭園では、とうとう背後から悪魔に襲われた、と彼女は語る。他方で、池袋に裏稼業人がいるから、セーフティーにいつて頼んでみなさい、と教わったのだという。

「真鍋美紀さんか、布施和香さん

……」

「その方の名前は、はじめて聞きました。実は、この神宮で結婚式を挙げた、一年先輩です」

「じゃあ、ちがうな」

神社の本殿まで来た。佐和子は小銭入れから賽銭を取りだし、手を合わせた。彼女の横顔を見ながら、一年先輩とはだれだろう、と井伊は考えていた。

「拝まないんですか？」

「お金で神様を買収して、頼みごとはしたくない性分なんだ」



「神様の買収って、面白い発想」

本殿を背にした。

「賽銭を出したがるらないのは、ケチかも」

「裏稼業人の信念でしょ。相談事を持ち込んで、いい加減さんから、神仏を信じなさいと言われたら、依頼主はシラケますものね」  
彼女が微笑んだ。

「こんな笑顔の素敵な女性に、とりつく悪魔は許せない」

「わたし、笑顔の少ない女、と言われてきました。でも、いい加減さんのまえだと、気持ちが明るくなるのです。ふしぎな人。病院には何度も来てくれたでしょ。その都度、ほっと、安心した気持ちになれました」

「気を許せてもらえて、光栄だ」

ふたりは、客殿と長殿を左右に見て、参道に戻ってきた。ここは日本一の大鳥居までやってきた。

「檜造りの明神鳥居としては、日本一なんだ。くわしく言えば」  
鳥居の高さ、12 m、柱間9.1 m、柱の径は1.2 m、笠木の長さ17 mだ、とおしえた。

「よく記憶されていますね」

「脳細胞が雑学と、歴史はなにかと栄養源にしている。あまり意識しないでも、吸収してしまう」

「特技なんですね」

「特技といえば、入院病棟の休憩室に、冒険スキーがいた。山崎さんといったかな？ 雪の断崖をスキーで降りてくる。すごい

ものだ。かれは八ヶ岳の山小屋にも、くわしそうだった。そんな話題が出ていなかった？」

「あの人がいると、病室に逃げ帰りました」

「悪魔に似ていた？」

「そうじゃなくて、生理的に嫌なひとです」

「男性と違って、女性はとかく感覚や直感で、人間の好き嫌いを判断するからな」

大鳥居をくぐり南参道に入った。彼女がふいに足を止めた。こちらの顔をじっとみていた。

「実は、両親や祖父母が嘘をつくとは思えませんが、誘拐事件は作り話なのかもしれません」

「えっ、なぜ？」

「当時の新聞を念入りに調べてみました。長野県の地方紙も含めて。どの新聞にも、わたしの誘拐事件は一行も載っていないのです。『六歳児が八ヶ岳の山小屋で、無事に発見』と、新聞に一行も出ていないなんて、考えられません。現に、私はこうして生きているのですから」

井伊のケイタイが鳴った。鬼頭統括部長からだった。

「いまだどこにいる？ 社長が店に来ているんだ」



「明治神宮です」

「そばは女がいるだろう」

「お札を売っている巫女さんなら、そばにいますよ」

「ごまかしはきかないぞ。裏が取れているんだ。事務員の話だと、女から私用電話がきて、明治神宮に行ったそうじゃないか」「ベラベラしゃべってくれたものだ。店長と事務員との間で、信頼関係ができていないと、部長にまで告げ口されるのか」

井伊はことさらなげいてみせた。

「事務員をちよつと問い詰めたら、白状したんだ。午後から社長が池袋店にくると知ってながら、女と明治神宮でデートか。どういう考えだ」

鬼頭が怒鳴った。

「それは部長の誤解です」

「なにご誤解だ。私用で女と逢っていないがら」

「私用ではなく、公用です。店内で骨折された鳴野佐和子さんが、きょう退院できましたので、神様に報告を兼ねて、明治神宮に参ったのです」

「退院祝いで、明治神宮は聞いたことがない」

「部長はご存じないようだ。戦国時代の武将は戦いに勝つと、かならず戦勝の奉納で神社に詣でていました。同様に、病氣回復のときも」



「いまは戦国時代とちがう。それに、明治神宮ができたのは、明治に入ってからだろう」

「池袋店はこのごろ事故やクレームばかり。悪魔が店にのり移った、という社員もいます。鳴野さんの退院で、このさい併せて、一度お払いをしよう、と詣でたのです」

「店で、事故やクレームが多発するのは、店長の管理能力が欠けているからだ。神社のお払いで改善できるわけではない」

「そういう見方が一般的だとわかっています。でも、神仏に頼りたいのが、人間の本能。会社から、護摩料まで経費で落とせない。自己負担なら安いほうがいいと思って、明治時代に創建された、新しい神社のほうが、護摩料が他より安そうだったので、ここに決めました。神社仏閣はどうも裏で協定しているらしい、ほとんど同じ値段です。これは独禁法違反。公取は何をやっている?」

「そんなくだらない話を聞いているヒマはない。社長が、店長とひざ詰めでお話なさるそう。女に逢うために、無断外出する店長だ。本人から直接、店長業務をやる気があるかどうか、聞きたいそう。神社の水で、クビを洗って、すぐ帰ってこい」

鬼頭の語気がこれまでになく強かった。

「ウソついている。社長は都合があつて、池袋店に来ていない」



「なぜ、そういう切る」

「蛇の道は蛇ですよ。東中野店にいるとき、松平会長から社長に電話がきて、店まわりを午前ちゆうで止めて本社にもどられた。鬼頭部長ひとりが店まわりをつづけている、と情報が入っているんですよ」

「……すると、東中野店の店長だな。池袋店の井伊店長だけには、社長の店まわり中止は教えるな、といったのに」

「鬼頭部長は東中野の店長に、おれは事務員に裏切られた」

「社長が店にこないからといって、退院したばかりのお客さまと明治神宮でブラブラしているんじゃない。すぐ店に帰ってこい」

「執念深い、上司だ」

「こういう徹底した、部下管理が大切なんだ。帰ってきたら、よく教えてやる」

鬼頭が電話を切った。

写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有)本多企画・小林陽子さん(詩人)

写真提供(インド)・インド政府観光局

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】